

街並み発見

沖縄・宮古島の赤い瓦屋根風景は今

伊達美德

映画で見た珊瑚礁は

もつ30年も前だが、偶然に見た映画の中の風景が忘れられないでいた。それは南の島で珊瑚礁が海の上に広大に現れ、島の人々がその水溜りに取り残された魚介類を採取するのだが、満ちてきた潮に取り残された母子の悲劇が起きる。

物語の舞台の島も映画の題名も忘れてしまっていたのだが、その島と海の美しさだけは忘れずについて、その珊瑚礁をいつか見たいと思っていた。

今年初めに新聞に、一年に数回しか現れない珊瑚礁の幻の大陸を訪ねるといふ団体ツアー募集広告を発見。これだ、と申し込んだ。沖縄の那覇から500km

南西に三百キロ先の宮古島で、その北の海中から大潮の干潮時だけに現れる「八重干瀬（やびじ）」という珊瑚礁である。

4月11日
横浜から二千キロの旅路の果てに、ついに見てきたのである。それはそれで感動したのだが、あの映画とはずいぶん違う風景だ



った。考えてみれば、大潮で珊瑚礁が現れるのは、広さに違いはあってもこのあたりでは珍しいことでもなさそうだった。

そこで帰路の船中で一生懸命に思い出したのは、映画の題名が「青幻記」、主演男優は田村高弘、そして帰郷後に調べると、原作の小説作家は一色次郎であり、1963年に発表して太宰治賞を受けている。肝心の舞台の島は、八重干瀬ではなくて沖永良部島だった。沖縄の北、奄美諸島のひとつである。いつの日かそこにも行く。

さて八重干瀬の珊瑚礁であるが、白状すれば自然環境破壊に一役買ったことは間違いない。3日間だけの観光ツアーだが、なにしろ全国からやってきた数百人の観光客がフェリーボートの駐車スペースも占領して乗り付けて上陸するのだから、どんなに気をつけて歩いても珊瑚は大きく痛む。

わたしもつい珊瑚のかけらを拾ってきたものだが、これを全部で千人以上がやれば、どうなるのだろうか。珊瑚礁にはいまオニヒトデが繁殖して珊瑚を食い殺して問題なのだそうだが、本物の人手が珊瑚を荒らしているとも言える。

宮古島の観光資源として地域活性化に生かしたい気持ちも分かるが、いずれ問題になりそうである。さて、困ったものではある。

オーストラリアのグレートバリアリーフで見たほどには多様でも極彩色でもないが、確かに人を惹きつける海の営みの自然がある。もっとも、珊瑚のいぼいぼが並ぶ形は、しげしげと見ると気持ちが悪いくらい。

観光バスは苦行の場

八重干瀬に加えて、宮古島とそばの島巡り観光もツアーの中にしていたので、観光バスで巡った。実はこのようなお仕事ツアーに乗ったのは生まれてはじめてだったのだが、いやはや、女性バスガイドのしゃべることしゃべること、うるさいったらないであった。

たまたま一番前に席を指定されたのでこれは写真取るにも都合良いぞと言んだのもつかの間、彼女が前に突っ立っているから邪魔だし、こっちの興味とガイドの話とは違うし、体操やらクイズやら歌の合の手やらを無理やり参加させられるし、目の前だから見るわけに行かないし、こっちの人が一生懸命にやっているのに水を差すわけにもいかないし、どうにも困った。

宮古島の北隣の池間島にも橋を渡ったが、ガイドが言うにはこ

の橋は約100億円の工事費、島の人口は数百人とのこと。離島振興はたいへんであるが、どうも橋そのものが観光資源であるらしい。

橋を渡って池間島に入ったところに数軒の土産店が建ち並んでいるのだが、観光バスはここに客を下ろして買い物させ、すぐまた橋を渡って引き返したのだ。その土産屋集落風景の汚ならしいことよ。これでは池間島の印象を悪くするだけで、かえって観光にならないだろう(写真下)。

バスガイドにそういったのだが、どうも納得がいかない様子だったのは、うるさいおじいさんの喋りかと思っただけ。

観光バスコースは宮古島の自然を見せるのが目的だったようだが、どれもこれも観光地コースとして作った自然みたく、全体に納得がいかないものだった。橋や砂浜をみせられても、そんなもの本土にもあるわいと、珊瑚ほどには面白くもない。どこか観光の考え方が間違っているような気がする。

宮古島が観光で生きていくには、お客様は別大地リゾートでお過ごしくださいというふうな二十世紀型観光でよいのだらう。



か。そんなところは宮古島でなくてもいっぱいある。宮古島に來ないと出会えないもの、ほかでは出会えないところはなにか、それを発掘して売り出すべきだろう。わたしとしては平良やそのほかの街や村を案内してもらい、地元の人たちと交流する旅をしたかった。

赤い瓦屋根の沖縄風景は今

お仕合せ観光は結果として仕方なし参加になったが、とまったのが平良市の街なかのホテルだったから、早朝と夕方に街並み発見一人徒歩ツアーをして、街並み、市場、商店街、神社(ウタキ)など、これが珊瑚礁にならんで面白かった。

沖縄の島で街並みが有名なのは、まだ写真でしか知らないが、竹富島の赤い瓦屋根を白漆喰で固めた瓦根の家々の風景である。伝統的建築物保存地区指定にもなっているくらいそれは美しい。珊瑚からできた土で焼くとあの赤い瓦ができるのだそうだから、沖縄どこでもその瓦ができるはずだ。ところが今、那覇でも平良でもそれを言いた瓦根を見ることは難しい。

ほとんどの家はコンクリートの柱梁が見える平らな瓦根となり、壁や手すりにコンクリートブロックがはめ込まれているのが、基本的な形式となっている。台風被害を克服する形式として戦後の普及した建築だそうである。赤瓦の家と比べるとそれはまったく



美しくないが、メンテナンスはしやすいのだらう。

宮古島の観光バスからは赤い瓦屋根はほとんど見られなかったのだ、平良市街一人徒歩ツアーでは赤瓦屋根家屋を探したのである。表通りにはめったに見られないが、一歩裏通りや横路に入ると結構たくさんあるのが分かった。実は那覇でも同じような発見をした経験があるので、平良市でもあるに違いないと予想してはいたのだが、どの家も緑が豊かであり、それと赤い瓦が良く似合う美しい風景だった。赤瓦ではなくセメント瓦を白漆喰で固めた家もあるが、それもそれなりに美しい。瓦根があることで全体のプロポーションが良いのである。(写真左)

沖縄の街に赤瓦屋根を取り戻すと、どんなにか美しい風景になるだろうと想像するだけでも楽しいが、よそ者がそういっても無理な注文だろうか。技術開発で台風を克服する瓦屋根だつてできそうなものだが。

那覇ではわが足で、首里城と牧志公設市場の定番観光をしたのが、さすがに沖縄観光の王者である。あれは5年前だったか、台風で飛行機が飛ばなくなった日、仕方ないので首里城に昇ったが、さすがに人の子ひとりない中庭に豪雨がたたきつけていた。中城城跡にも行ったが、森を揺さぶる風が轟音となってダイナミックな石垣の上に響きわたっていた。忘れられない沖縄の自然と人口との出会う風景であった。(050501)